
SHIFTER!!

壱号/亥識

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SHIFTER!!

【Nコード】

N4058Q

【作者名】

雫号/亥識

【あらすじ】

気が付くと、そこは見知らぬ路地だった。
。 。
白い建物、黒い地面、灰色の空。
記憶を失くした彼女と、紺色マフラーの少年。
ほんの少しサイバーで、僅かだけれどパンクなセカイでの出会い。

街という名の小さなセカイ

気が付くと、そこは見知らぬ路地だった。

道の両脇には、永遠に続いているかのような白く、高い壁。少なめに見積もっても、私の背の二倍はあるだろう。壁の向こうは見えないけれど、その向こうにさえ人は居る気がしなかった。

私がへたり込んでいる地面は黒く、そして私の知識には無い素材であった。アスファルトでも、レンガでも、コンクリートでもなさそうだった。強いて言うのなら、プラスチックやガラスの方が似ている。つやつやとしたその表面は、とても冷たかった。

ふっと見上げた空は、絵の具かペンキでもぶちまけたかのように澱んで、沈んでいた。灰色に濁りきったその空には、しかし雲ひとつ無い。曇っているから灰色なのではなく、そもそも空が灰色なのだ。

はつきり言って、怖い。

周囲には人つ子一人いない。それどころか生物がいるかさえも疑わしい。それほどに静かで、寂しい。このセカイに、私だけしか存在しないような錯覚。

白い壁、黒い地面、そして灰色の空。無機質で命の感じられない空間。独りになった気分、実際独りだった。

そして何よりも、私は恐怖していた。

「……………私は、誰？」

私が、自身の記憶を失っている事に。

自分の名前が分からない。自分の家族を思い出せない。自分の友

達を知らない。自分の故郷を覚えていない。自分さえも記憶から抜け落ちて、脳が欠けたようだった。

ここが一体何処で、今は一体何時なのか。そもそも、何故私がここに居るのか。

分からないし、知らない。思い出せないのは、覚えていないから。抜け落ちていて、欠けている。

悲しくて、怖くて。涙が出そうになったけど、そんな事は無かった。

私はこんな時、泣かない人間らしい。

「おこ」

「……っ、え？」

だけど、突然飛んできた声には驚いた。それは私の知らない音で、不思議な響きだった。

私は振り向いて、声の主に「誰？」と尋ねようとした。だけど声が出なくて、疑問符を浮かべる事しか出来なかった。

「何してその、あなた？」

振り向くと、一人の男の子がいた。

多分だけど、私よりも背は低い。小学生か中学生に見える。見た目の幼さと、銀色の短い髪が不似合いだった。

薄い水色をした袖無しの服は、なんだか私の知っているよう服と雰囲気は違っていた。『センスが違う』というか『時代が違う』ような、そんなズレがあった。首には紺色のマフラーをしているけど、背が低いからちよっとだけ引きずっている。袖無しにマフラーというのは、どういう事だろう。

「あ、え……つと」
あれ、通じてない……?」

私が掠れた声を出しながら戸惑っていると、男の子は肩を竦め、私の方に歩いてきた。

そうして、右手を私に差し出して 言った。

「Are you OK?」
「……い、いえす」

英語だった。超英語だった。そして、私は英語を苦手としている事が判明した。

戸惑いつつもその手を握り返すと、男の子の表情が少し明るくなった。だけどまた考え込むように眉を顰めて、再び口を開く。

「……どっちの言葉の方が解り易い?」
「そ、そっち。じゃぱにーずぷりーず!」
「どっちだよ……」

男の子はまた肩を竦めて、溜息を吐いた。少し申し訳ない気分になりつつ、手を借りて立ち上がる。

ふらふらと、足元が覚束おぼつかない。所謂千鳥足になりながらも、私は男の子に手を引かれる。

「なんでこんな偏屈なトコで座りこんでたんだ、あんた?」
「……わかんない」
「あ、訳アリってヤツ? 言いにくいならいいんだけどさあ」
「や、そうじゃなくて……」
「っーかくシブンメイ」の言語コトバなんか使ってる奴は初めて見たぞ。
語が通じない奴もだ」

また、耳慣れない響き。発音は日本語に近かったけれど、私はその単語を聞いた事が無い。四文明か、詩文名か。それとも四分盟？男の子は、私の手を引きながら独り言のように色々呟いていた。

「……ねえ。何処に向かっているの？」

「『何処に』って……見りゃ分かるだろ、流石に」

短くそう告げると、男の子は私の手を握っていない方の手で指差す。

私達が歩く前方、路地の終わりの
その先を。

「街だよ。このセカイで唯一つの、街」

路地が終わる。

閉ざされた空間が開けて、そうして視界が一気に切り替わった。喧騒が生み出した音達と、人混みから弾かれた光達が私に飛び込んでくる。

「街なのは、流石に。見れば分かるよ。そうじゃなくて、何処に」

「あーあー、今日は<ロイド>も<ヒューマ>も多すぎ……だよなー？」

「え、あ、えと、同意を求められても……」

人混みを掻き分け、私達は進む。男の子は、結局何処へ向かってるか教えてくれなかった。

引つ張られるままについて行って、どれ位時間が経ったか。やっと、男の子がその足を止めた。

灰色の空は明るくも暗くもならないままで、空にふたでもさされて
いるようだった。

私は肩で息をしながら、掠れた声で尋ねる。

「はっ、はあっ……… ねえ。君、はあ……… 何っ、何が した

いの………？」

「何にも知らなさそうなあんたに、見せてあげようと思つてさ」

男の子が私の肩に手を置く。私は息を整えながら顔を上げて、男の子が指差す方を見た。

私が連れて来られたのは、高い塔のような所らしく、さっきまでいた街が全て見渡せる。

遠くから見ると剣山のような街並みは、その殆どが白かった。それだけでも異様だと感じただろうけど、それよりも私は別の事に驚愕した。

何も無かったのだ。

荒廃した なんて具合じゃない。街以外の場所には何も無い。

荒れ果て乾ききった地面さえも 存在しない。果てしなく地平線まで続くのは、ただひたすらの無。高い、高い塔の上に、この街があるような。そんな景色だった。

「これが、このセカイの全て。知ってた？」

男の子は、ふざけた様子でそんな事を言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4058q/>

SHIFTER!!

2011年1月26日12時39分発行